

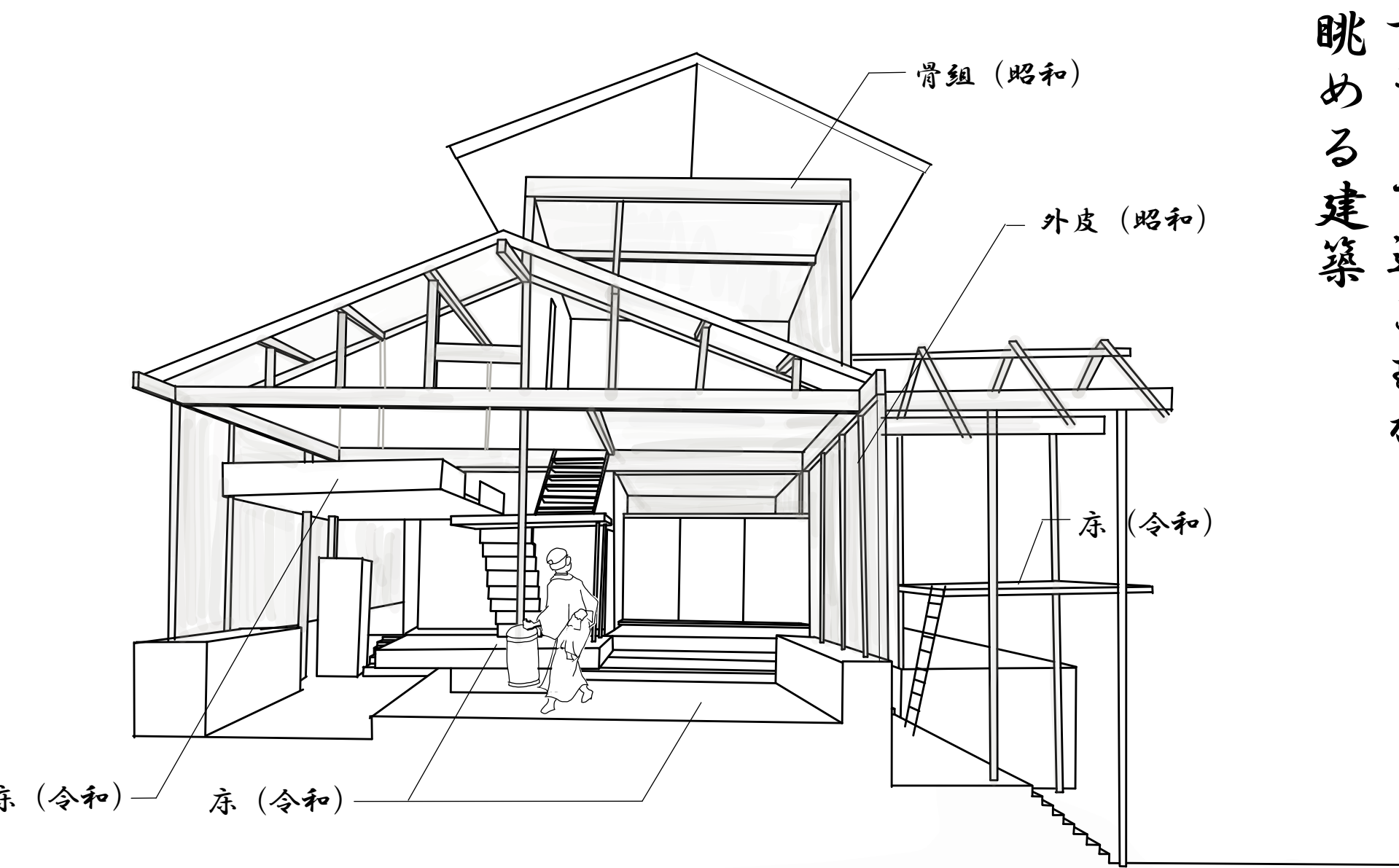
唯々庵

遅き日のつもりで遠きむかし哉

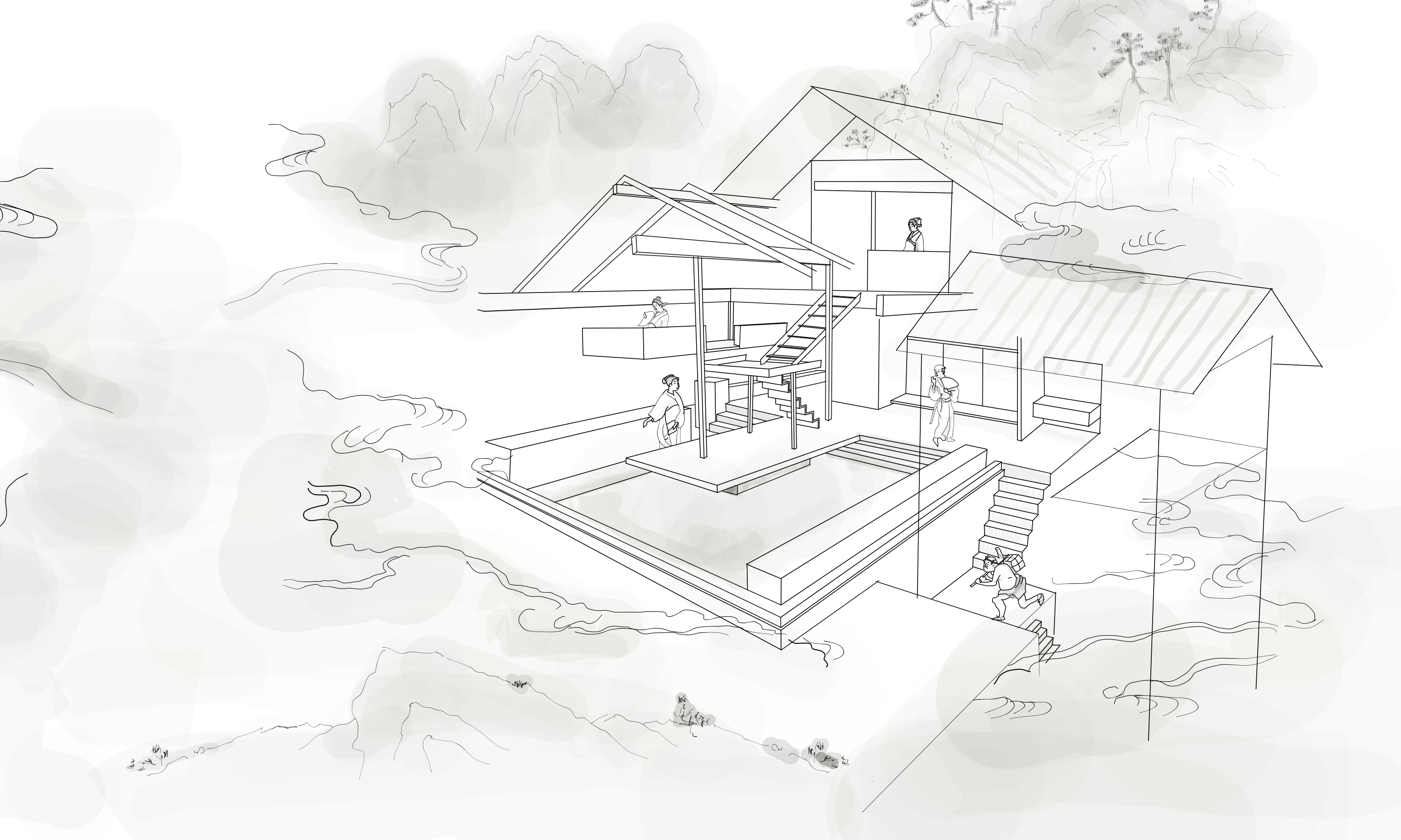
敷地は昭和30年から40年代に開発された住宅街に位置する。上宮天満宮の社に面して淀川水系の平野を望む。眺望から顧れた穏やかな自然の空間と、共に残る住まいに残る数寄屋の気配と共に、安田庵心の南東から、い時を感ずる。



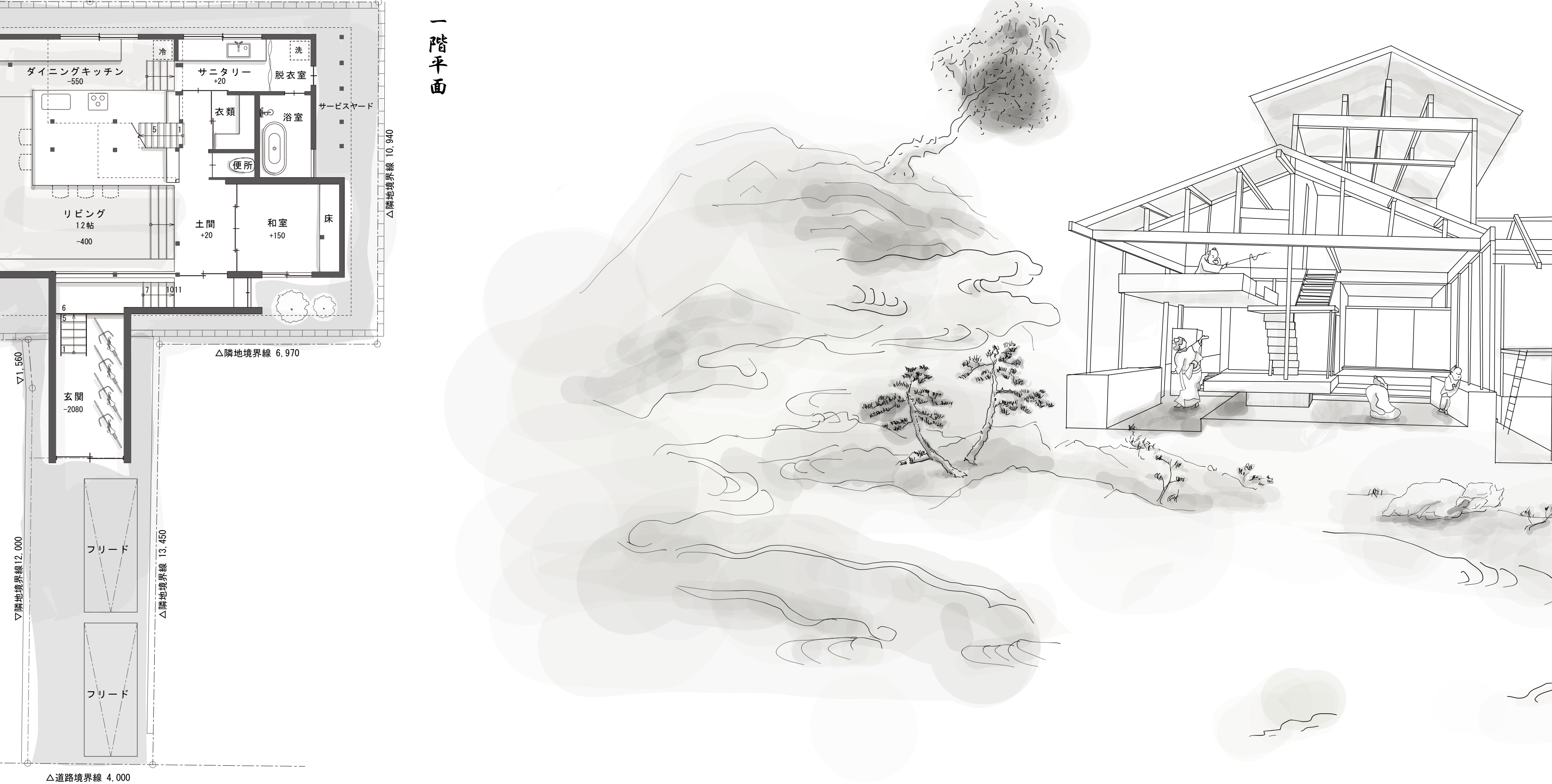
つもりて遠きむかしを眺める建築



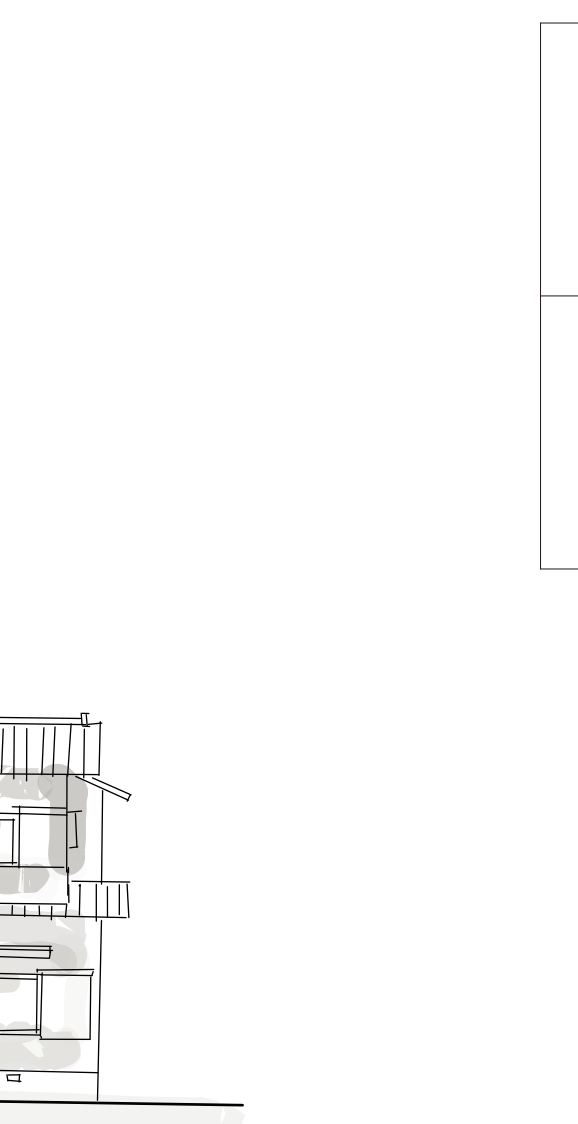
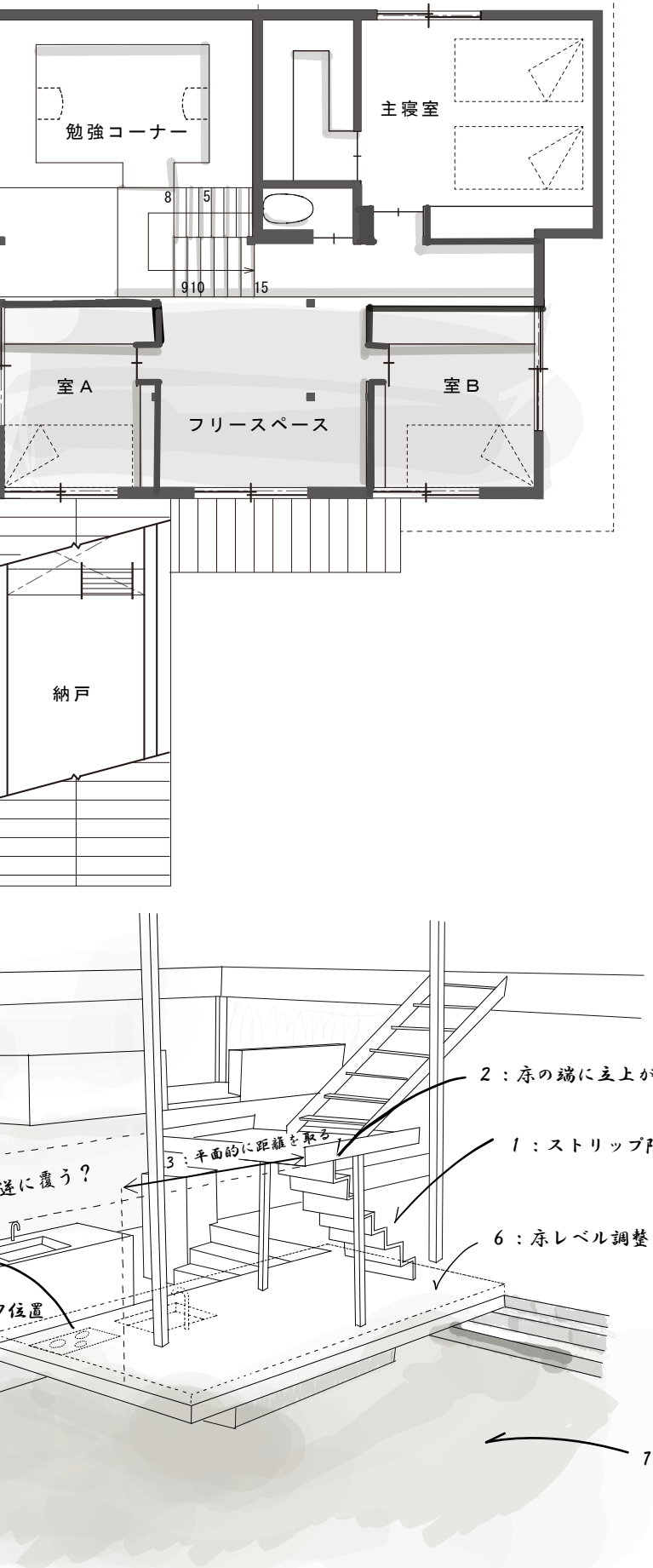
ここを新しい世代の住まいとするにあたり、現代の暮らしや将来の変化という機能的な条件整理のほか、先代との距離感が大切と考えた。近きで同化する訳ではなく、過去の意匠を折り物として陳列するでもない。先代からの宮を感ずるが、新世代を主とする歴史を重ねて行く器したい。ここでは、風雨を凌いだ外皮構造をまえてきた骨組を、文人とその家族が過ごした痕跡として残し、新たに挿入する床からそれらを景色として眺める構成とした。住まいの中に家族の居場所を散りばめ、かっこいいの気配を感ずるが、遠く。そこに先代の香りがはのかに漂えば、過去から未来に積もって行く日々を大切に感じられはしないだろうか。



一階平面

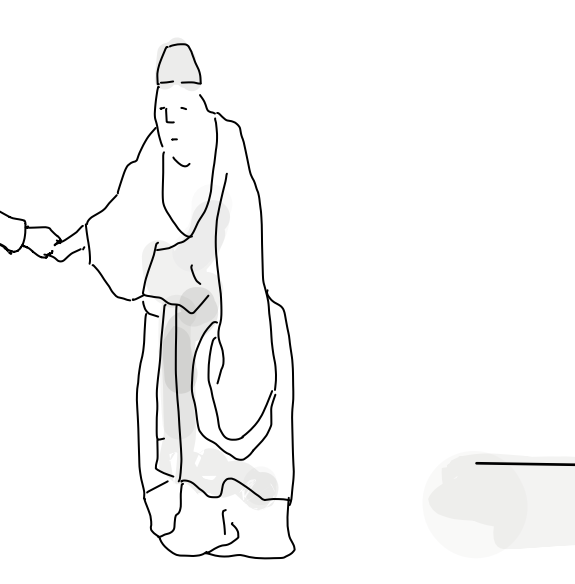


二階平面



昭和

引き継ぐ



令和

